

偽物語 かれんビー第一話副音声

アバン

ケ原 「裏音声から聞いているロリコンはいないでしょうね。こんにちは、ラブリーアイドル戦場ヶ原ひたぎです」  
羽川 「いきなり毒づかないでください！ ダメ、この入り、ダメ！ 戦場ヶ原さん、もう一度最初から、最初からやり直してください！」

ケ原 「はい」

羽川 「ディスク2！」

ケ原 「東京都以外のみなさまこんにちは。非実在性青少年、戦場ヶ原ひたぎです」

羽川 「なぜ東京都を外す！」

ケ原 「え？ だって東京じゃ売っていないんでしょ、このディスク」

羽川 「売ってる！ 売ってる売ってる！ 絶賛発売中！」

ケ原 「十八歳以上の皆様こんにちは。結婚できる年齢の高校生、戦場ヶ原ひたぎです」

羽川 「やめてあの、若干洒落にならない……」

ケ原 「結婚できる年齢の高校生というのは嘘じゃないでしょう？ 現在婚活中、素敵なお嬢さんを募集中、戦場ヶ原ひたぎです」

羽川 「阿良々木くんは？」

ケ原 「え？ 誰がこのアニメを見た後で彼を娶ろうという気になるの？ 視聴者の皆さん、この副音声聞いてくださっているということは二話までは既にご覧になったということのはずですけど、あんな女子から女子への渡り鳥みたいな男を娶れませんか？」

羽川 「視聴者の皆さんに同意を求めないで……。というわけで戻しましてアニメ偽物語 Blu-ray or DVD を買い上げの皆様、楽しんでいただけましたか？ 私、第一巻の副声を担当させていただきました直江津高校三年生、羽川翼です。そして」

ケ原 「なぜか呼ばれてしまいました同じく直江津高校三年生、戦場ヶ原ひたぎです」

羽川 「なぜかって、戦場ヶ原さん、あなたヒロイン……」

ケ原 「いえいえ、ヒロインはヒロインでも名ばかりヒロインでしょう？ これも視聴者の皆さんもう言うまでもないと思いますが、私の出番この冒頭のシーンでおしまいなの。もう出てこないの。二巻をお楽しみに、なの。だから、副音声的にはこうやってご挨拶をしているうちに、私の出番は終わっちゃうのよ。何これ」

羽川 「なんだったら、挨拶は後回しにして、この拉致監禁劇についてじっくり話す？ お話ししあう？」

ケ原 「羽川さん羽川さん。あなたがそんなことを言うなんてがっかりだわ羽川さん。視聴者の皆さんへのご挨拶を忘れたら絶対にダメ。例えば体重を失くしても礼儀は重んじるのがこの私のよ」

羽川 「例によって例のごとくうまいこと言えてないなあ……」

ケ原 「さあ、画面のことは一旦忘れて自己紹介を続けましょう。拉致監禁をしない少女、戦場ヶ原ひたぎです」  
羽川 「たいいていの少女は拉致監禁をしないでしょう！ 明確な描写はないけれど、本編の阿良々木くんの様子から察するにあなた阿良々木くんを暴力的に連行してるでしょう。だったら誘拐じゃなくて略取だから」

ケ原 「え？ 略取と誘拐は違うの？」

羽川 「暴力的な身柄の確保は略取、そうじゃなく言葉巧みに確保するのが誘拐。国語で習ったでしょう？」

ケ原 「習っていないと思うわ。え、略取はわかるけどどういこと？ 言葉巧みに、ってどういう行為を指して誘拐って言うの？」

羽川 「うーんと……『お菓子あげるからついてこない？』かなあ」

ケ原 「ああ、なるほど。『笛を吹くからついてきな！』とかね」

羽川 「ハーメルンの笛吹き男はそんなロククじゃなかったと思うけれど……」

ケ原 「これだけの情報からなぜつつこめる……」

羽川 「じゃあ残念ながらちゅーの話でもしましょうか」

ケ原 「堪忍してください。というか、恋人同士の二人っきりのラブラブ話を公開されている時点で、どうでしょう、私はもう拉致監禁に対する十分な罰を受けている、と言っていいんじゃないかしら」

羽川 「これが、恋人同士の二人きりのラブラブ話……？」

ケ原 「ラブラブでしょう？ 『あーん』して食べさせたり、飲ませたり」

羽川 『あーん』して飲ませるっていうのはないんじゃないかなあ……」

ケ原 「いえね、苦言を呈するわけじゃないけれど、私なんてひどい目に遭ってるか、ひどい目に遭せてるかのどっちかばかりなんだから、それをどうして自分で解説しなきゃいけないんだって話じゃない？ どんな説明プレイよ」

羽川 「……とにかく嫌なんだね、自分の悪行を自分で解説するのが」

ケ原 「私は、悪いことはするけれど、悪い人だとは思われたくないの」

羽川 「普通だね。普通」

ケ原 「だから言っているでしょう、なんで出番がないのに呼ばれなくちゃいけないのかって話よ。裏話のしようがないでしょう？ 知らないんだって、阿良々木くんの妹さんとか。そりや有名だから噂には聞いてたけれど会ったことはないんだって」

羽川 「ああ、そういえば前作で、妹さんたちを盾にとって阿良々木くんを、脅迫してたよね？」

ケ原 「おっと地雷を踏みました。でも大丈夫、遙か昔の話」

羽川 「作中時間的には二ヶ月前くらいです」

ケ原 「詳しいわね、さすが羽川さん。まあでもあのときは脅迫してみたものの、今回の偽物語で妹さんたちをクローズアップしてみると、彼女たちをどうこうするのはちよつとむずかしそうよね」

羽川 「まあ、確かに……って、ナチュラルに彼女たちをどうこうする話をしないでください。そんな相談を私に持ちかけないでください」

ケ原 「あの時の脅迫が原因なのかしら、阿良々木くんが中々、私を家族に会わせてくれないのは」

羽川 「多分そう……いや、その脅迫だけじゃなくてあらゆる脅迫が原因だと思うけれど。この拉致監禁もだよ？」

ケ原 「あんまり拉致監禁拉致監禁言わないでよ。私が嫌な気分になるでしょう」

羽川 「すごいセリフだね……そんなこと言ったら私こそでしょう？ 出番のなさで言ったら本当じゃないじゃない、私の出番。アニメ化物語第一巻でもそうだったけれど、その比じゃないぐらい本巻では出番がないでしょう？」

ケ原 「うーん、えつと、あの、失礼を承知で申し上げますが羽川さん、出られてましたっけ？ この第一巻」

羽川 「出てません。出番がないっていうのが出番が少ないって意味じゃなくて、掛け値無く無いという意味と相成ります」

ケ原 「ああ、違う。あつたあつたありました。羽川さん忘れてるって。阿良々木くんに電話かけてたじゃない、阿良々木くんの電話が回想、って光ってたじゃないの」

羽川 「あれを出番って言っているいいんだつたらさっきのシルエットの神原さんだって出番だよ……」

ケ原 「え？ あの阿良々木くんの首に手を回してたシルエット、神原だったの？ おのれ神原、首をねじる」

羽川 「シルエットでもだめなんだ……」

ケ原 「まあ、そんなことを言っていたら、このディスクは見られないけれどもね。でもまあ、こればかりは仕方ないんじゃない、羽川さん」

羽川 「仕方ないって、何が？」

ケ原 「だって、副音声と言えば、羽川翼じゃない」

羽川 「違います。やめてください、違います」

ケ原 「違いますって、でもそうでしょう？」

羽川 「そのイメージが定着すると本当にまずい。この後ディスクが何巻出ると思ってるの」

ケ原 「ああちよつと待って。黙って」

ケ原 「何この名曲。魂を振るわすサウンドという言葉がまさにぴったり来る、いわゆる現代のポピュラーミュージックとは一線を画す、人魚に代々伝わるオペラなんじゃないかという上品な調べ！ …… って、ああ、なあんだ、私の歌か」

羽川 「そんな愚にもつかないセリフを聞かされるために、私大事なところで黙らされたの……？」

ケ原 「愚にもつかないまで言われるとは思わなかったわ」

羽川 「失礼、言い過ぎました」

ケ原 「ところで、人魚って歌がうまいというのが定説だけど、でもどうなのかしら、水の中で歌っても歌声ってうまく響かないんじゃないのかしら。『ボエー』ってなっちゃうんじゃないかしら」

羽川 「人魚が歌う場面って、大体岩礁の上に座って歌ってるイメージだけれど。こんな風にハープとか持って」

ケ原 「ああ、なるほど。ハープを持ってる動作をありがとう、羽川さん。そこまでしてくれなくともわかったけれど。えっと、でも、人魚の正体ってジュンコなのよね？」

羽川 「誰？」

ケ原 「ああ、違った。ジュゴンなのよね？ ジュゴンって岩の上で休んだりするの？」

羽川 「そもそも、ジュゴンは歌わないよ。ハープ持たないし」

ケ原 「あらら」

羽川 「逆なの、逆。それはジュゴンが人魚の正体じゃなくて、人魚という空想上の生物とジュゴンとを見間違えた、みたいな話なの」

ケ原 「へえ、そうなんだ」

羽川 「不思議なもので、人魚伝説って世界中どこにでもあるんだよね。日本でもあるし」

ケ原 「ああ、ごめん。ちょっと黙っててくれないかしら。私の歌が聞こえないから」

羽川 「あなたの振った話題を広げようとしている私を黙らせるのにそんな理由がある？」

ケ原 「何よ、羽川さんだってどうせ、自分のオープニングは褒め褒めだったんじゃないの？」

羽川 「私のオープニングはテレビでは流れませんでした」

## △パート

ケ原 「じゃあ、私の悪行も終わったところで本格的に始めましょうか。副音声さん、もとい、羽川さん」

羽川 「そんなもといがありますか！」

ケ原 「何よ、さっきから私の一言一句につっかかってきて」

羽川 「つっこみどころしかないんだもん」

ケ原 「私、本来だったらもう出番終わったんだから帰ったっていいのよ」

羽川 「いや、私も確かに出番がないのになんで呼ばれたんだ、みたいなところを言ってるところではあったけれど、でもね、戦場ケ原さん、あんまりそんな風に嫌々やってるみたいなイメージを強調すると、せっかくお買い上げくださった皆様ががっかりしちゃうから、この辺にしようよ」

ケ原 「でもね、羽川さん、案外そうでもないのよ。こうね、かわいい女の子が、嫌々、無理矢理、強要されて、やりたくもないことを理不尽にやらされている図を見て『ひゃっほい！』となってる視聴者の方も、相当数いらつしやると思うのよ」

羽川 「いません、そんな人は！ いません。いいですか、いません」

ケ原 「私のファンの八割はそういう人よ」

羽川 「あなたのファン大変すぎるよ……ほら、月火ちゃん、お兄ちゃんと兄妹水入らずの会話だよ」

ケ原 「気怠そうな子ね」

羽川 「うーん、朝だから眠いんじゃない？」

ケ原 「心なし、阿良々木くんの態度が荒っぽいのは、これもやっぱり眠いから？ 低血圧？」

羽川 「いえ、阿良々木くんは妹さんにはこんな感じ」

ケ原 「荒々しい阿良々木くんのアラを煮込んであらあら不思議というわけね」

羽川 「ちよっと怖い『あら』が入ってなかった……？」

ケ原 「これは肖像画なのかしら」

羽川 「いえ、カレンダー」

ケ原 「ああ、火憐さんだけに。一人っ子はどうしても兄弟姉妹に憧れちゃうわよね。お兄ちゃんが羨ましい、妹が羨ましい、双子の兄弟欲しい」

羽川 「うーん……まあ私も一人っ子だからわからなくもない。最後の以外は」

ケ原 「……なんだか、真面目な話をしているのかしら。……ただ、喧嘩がコミュニケーションの手段、という暴論にはさすがに領けないわ」

羽川 「領けないんだ……」

ケ原 「ラブアンドピース、人類みな兄弟、という言葉彼女に教えてあげたいわ。人と仲良くすることが一番大事だって、なんでわからないのかしら」

羽川 「うん……やっぱり同じ問題を抱えている相手に関しては、人間どうしても饒舌になっちゃうよね……」

ケ原 「え？ びっくりしたんだけど。この子今何に怒ったの？」

羽川 「まあ、阿良々木くんの追及に」

ケ原 「いくらなんでも気が短すぎない？」

羽川 「そういう子らしいの。阿良々木くん曰くだけど、すぐキレルんだって」

ケ原 「阿良々木月レ火ってこと？」

羽川 「う、うん？」

ケ原 「月火の火に紐つけて、名前の中に『キレル』を混ぜたのよ」

羽川 「説明されてもよくわからない……」

ケ原 「……リモコン投げたわよ、あの子」

羽川 「投げたねー」

ケ原 「普通、投げて赤鉛筆まででしょう？」

羽川 「どうだろう、鉛筆の方が危険じゃないかな……」

ケ原 「鉛筆じゃなくて赤鉛筆だって。芯は柔らかいから平気」

羽川 「柔らかくても刺さったら痛いです！

………あっ」

ケ原 「ん、どうしたの？」

羽川 「あっ、まずい、これは危険だ」

ケ原 「ん？」

羽川 「戦場ケ原さん、今日はもうこの後全部私がやっておくから、帰っていいよ？」

ケ原 「え？ スロースターターの私がやとやる気を出してきたというのに、なんで今帰っていいなんて言うの？」

羽川 「ちよっとこの先に不都合な展開が待ち構えていることが見えてきたというか……この一話はまだしも、二話がちよっと……」

ケ原 「大丈夫大丈夫、羽川さん。もう一度テレビで見ているから、あの前髪中学生のことは私知っています」

羽川 「あ、そうなんだ……前髪中学生って……」

ケ原 「阿良々木くんに懐いている中学生がいるという情報は、この時点ではもう入手してます。見てない振りをしてあげているのです」

羽川 「そうなんだ……」

ケ原 「大人の余裕よ。まあ、中学生の一人や二人、そんな大事にはならないでしょうしね」

羽川 「は、でもそうだ。この月火ちゃんが、この巻の裏音を担当してくれているんだよね」

ケ原 「そうそう。この子と、さっきの前髪中学生と、中二コンビで。もちろん視聴者の皆様は、まだ全然聞いてないはずだけれどね」

羽川 「くだわるなあ、順番に……」

ケ原 「序列ってあるじゃない？ そりゃ」

羽川 「大人の余裕はどこに行ったの？」

ケ原「そもそも、裏音声ってなんなのかしら。当たり前みたいに言ってたけれど、裏音声って変な言葉じゃない？ 何、ずっと裏声なの？」

羽川「まあ、Blu-ray or DVD 第一巻発売記念だから、初回スペシャルということで、サービスなのかな？」

ケ原「初回スペシャル？ え、じゃあ二巻からは裏音声ってないの？ なーんだ、がっかりね。なんか損した気分」

羽川「絶対言っちゃだめだからね、それ」

ケ原「いや、サービスってやっぱり、やりすぎると逆効果なんだってば。提供した瞬間サービスはスタンダードになっちゃうんだから。だから、裏音声はもう収録中止しましょう。必要ない必要ない」

羽川「中学生にライバル意識剥き出しじゃない！」

ケ原「まあ、ディスクに音声が三つも入るという事実には、実はちょっと驚いてしまったわ」

羽川「ここから、シリアスな話だね」

ケ原「シリアスな話もするのね、この兄妹。まあ、こういう会話もできるようなら、コメンタリーを任せてあげてもいいかな、とは思ってあげようかしらね」

羽川「上からだねー……」

ケ原「だって、私結構前作でやってるんだから。一卷・三巻、それに五巻で一話分。ゆえに、この私が多少ベタランとしての風格を醸し出してしまうのは、やむを得ないでしょう？」

羽川「ベタラン？」

ケ原「ベタラン」

羽川「ベタランなら噛まないで……噛む子はこの後出てくるから」

ケ原「ベタランコメンテーターとして後進に対しては多少厳しいことを言っておかないと、やっぱり新人が育たないから……って、あら、かわいい太もも。いい生足ね」

羽川「それがベタランコメンテーターのコメント？ 後進に対して言う厳しいこと？」

ケ原「どうか、ベタランコメンテーターというならば、やっぱり羽川さんこそでしょう？」

羽川「まあ、頑張らせていただきました」

ケ原「さあ、そんな羽川さんから、裏でしゃべっているであろう後進の中学生たちに、上から目線のメッセージを」

羽川「二人とも、頑張ってるね、応援してるから！……ああ、ちょっと待って。普通に『頑張ってるね、応援してるから』って言っただけなのにあなたの振りのせいで皮肉みたいになっちゃったよ」

ケ原「ほら、事件現場にコメントしないと」

羽川「なんだか、ワイドショーのコメントターみたいになってない？」

ケ原「よくないアニメの影響で起きた事件です」

羽川「さすがに最近はそういうこと言う人も減ったけどね」

ケ原「ああ、八九寺ちゃん」

羽川「早く逃げて！」

ケ原「Aパート終了」

## Bパート

ケ原「このぬいぐるみの涙は、私たちの涙と言ってもいいんじゃないかしら。見た？ 阿良々木くんの顔」

羽川「で、この後の振りだね」

ケ原「振りよね」

羽川「一体この振りは、誰に対するなんの振りなんだろう。聞いてて見てて恥ずかしくなってくるんだけど。

……着々と独自の理論を打ち立ててる……自分に対する言い訳なのか、真宵ちゃんに対する言い訳なのか、視聴者の皆様に対する言い訳なのか判然としないけれど、とにかく見苦しいなあ……」

ケ原「辛辣ね。優しい羽川さんが辛辣ね」

羽川「これを優しく見守ったらまずいでしょう……」

ケ原「まあこれもツンデレだと思えばかわいいものじゃない？」

羽川「阿良々木くんを、誰よりも甘やかしているのは戦場ヶ原さんなんじゃないかという気もしてきたけれど……」

ケ原「さ、構えるわよ。クラウチングスタート」

羽川「この時ばかりは神原さんよりも速そう……」

ケ原「よいドン」

羽川「BGM、天国と地獄……行っただろ……」

ケ原「だからもう、恐ろしいわよね。これ、OVAとかじゃないんでしょう？ この阿良々木くんとか下敷きにしておるう」

羽川「売っちゃダメ」

ケ原「阿良々木くん、なんだろう、幼女にキスしすぎでしょう？」

羽川「スキシツプというにはあまりに過激な……」

ケ原「何歳だっけ、あの子」

羽川「十歳」

ケ原「絶句。」

羽川「……………」『こら、暴れるな、パンツが脱がせにくいだろうが』

羽川「『こら、暴れるな、パンツが脱がせにくいだろうが』

ケ原「こわ」

羽川「怖いねー」

ケ原「着ボイスにして配信しましょう」

羽川「誰が着信音にするのよ。……『よく見ろ、僕だ』って」

ケ原「あなただったからなんだというのでしょうか」

羽川「あなた以外の誰がこんなことをするの」

ケ原「でも、八九寺ちゃんとは本当にわかってなかったみたいね。ほら、阿良々木くんだとわかったらもう笑顔」

羽川「いや、おかしいでしょう……むしろもっと怒ろうよ、怒り心頭に発しようよ、恨み骨髓に入れようよ」

ケ原「しかし仲の良い二人ね。精神年齢が一緒なのかしら」

羽川「精神年齢というなら、真宵ちゃんは相当高い方だと思うけれど……」

ケ原「阿良々木くんに合わせてくれているのかもね。」

ケ原「……阿良々木ハーレム」

羽川「悪趣味な組織っていうか、恐ろしい組織だよ……」

ケ原「恐ろしいも何も、羽川さん、あなた創設期のメンバーでしょう？ 何を他人事みたいにおっしゃっているのですか？」

羽川「違います。創設期のメンバーとか言わないでください」

ケ原「チーム傷物語が第一期メンバーで、チーム化物語が第二期メンバー。で、今回の偽物語で、めでたく第三期メンバーとして、二人の妹さんが追加されたというわけね」

羽川「鬼畜すぎるね、そのハーレム……」

ケ原「このマネキンが実は伏線なのよね」

羽川「後の伏線。この時は何かかって思うけれどね」

ケ原「ここでわかった人いるのかしら。『あつ、キャッツアイをやる気だ』って」

羽川「いたとしたら驚異の推理力だね……。この辺りの発言が今となってはー、みたいな感じだね」

ケ原「阿良々木くんが、アニメ化に対してナーバスになっているのは、身長が低いことがばれるのが嫌だったかららしいけれどね」

羽川「火憐さん、何センチだっけ？」

ケ原「また羽川さん、何でも知ってるくせに、そうやって質問みたいなことをして、私の顔を立てようとしてくれようとしなくてもいいのに」

羽川 「あなた私をどういう性格だと思ってるの……？」

……これは……」

ケ原 「笑えないセリフよね」

羽川 「全く笑えないね。阿良々木くんも危険だけど、真宵ちゃんも相当危険だよね……」

ケ原 「彼女の人生にいったい何があったのかしら。十歳、達観しすぎでしょう。私はご存知の通り清貧に喘いでいる文学少女だけれど、それでもこんなことは言わないわよ」

羽川 「文学少女という設定を盛ってさりげなく自分の好感度を上げてない？」

ケ原 「あ、伏線と言えば、ここでマネキンの伏線を回収するみたい」

羽川 「エンディングでダンス」

ケ原 「今や定番よね。踊るエンディングと走るオープニング」

羽川 「走るオープニング？ あ、いや、言いたいことはわかるけど、なんかそんな、ジムみたいな表現……」。

……お、ここから真面目な話かな」

ケ原 「いえ、無理でしょう」

羽川 「うーん、真面目な話ができない組み合わせって、あるよね……」

ケ原 「真面目な話ができる組み合わせって、阿良々木ハーレムにあるのかしら」

羽川 「阿良々木ハーレムを公式用語みたいに使わないでください……いえ、私は相当できるつもりなんですけれど……」

ケ原 「その羽川さんだって、阿良々木くんと話すときは、つついとおもしろくなっちゃうでしょう？」

羽川 「うん、まあ……えっ？　じゃあ結局、阿良々木くんのせいってこと？」

ケ原 「これはつまり、阿良々木くんが妹さんたちに自分の吸血鬼体質のことを話すべきなのかどうかを相談している、ということよね。そしてそれを、年端も行かない少女に相談していると。そんな相談私にしてくれればいいのに、水くさいわね」

羽川 「いや、だから、妹さんのことを阿良々木くんは、戦場ヶ原さんにあまり話たくなかったんでしょう？」

ケ原 「ほうほう」

羽川 「何が『ほうほう』ですか」

ケ原 「でも、羽川さんもそういう相談を受けていないんでしょう？　何、羽川さんも阿良々木くんを脅迫したの？」

羽川 「こういうきつい言葉をね、あまり友達相手に使うのは心苦しいんだけど、戦場ヶ原さん」

ケ原 「はい」

羽川 「一緒にしないで」

ケ原 「こわ。」

……あれ、裁判所？　何、ついに阿良々木くん起訴されたの？　いけない、彼との繋がりを示す書類を処分しておかないと」

羽川 「おい。色々おい」

ケ原 「何の罪で起訴されたのかしら、心当たりが多すぎるわ。全ての罪を裁いていたら、裁判の長期化は免れないわね。だからまず時間はあるはず」

羽川 「違います。彼は無実です！」

ケ原 「何、不起訴に終わったの？」

羽川 「証拠不十分みたいに言わないで」

ケ原 「彼氏を疑い続ける勇氣」

羽川 「そんなのは勇氣でもなんでもない」

ケ原 「お、ここからバトルシーンかしら」

羽川 「違う違う」

ヶ原「えー。バトル無いの。アニメなのにバトル無いか大丈夫？ バトルしなかったら誰も見てくれないわよー」

羽川「何そのキャラ……」

ヶ原「アニメ業界のご意見番みたいな感じ」

羽川「そんなご意見番はいません。それに、その意見も随分古いよ？ バトルもちろんいいけれど、今はなんてことのない日常を描く、ありのままを描く青春物語っていうのが強い」

ヶ原「ああ、まさにこの偽物語のような」

羽川「ううん？」

ヶ原「何よ、間違っていないでしょう？ ほら、阿良々木くんのなんてことのない日常を、ありのままに描いているじゃない。青春ね」

羽川「確かにこの後得に何事もなく一話は終わっていくけれど、でも、これをなんてことのない日常と表現してしまうのには、若干の抵抗を覚えるというのが正直なところかな……あ、わかった、抵抗を覚える最大の理由。冒頭で阿良々木くん、拉致監禁されてる」

ヶ原「あれだって、阿良々木くんの日常の立派な一部分じゃない。阿良々木くんはいつだって、女の子に拉致監禁されているのよ」

羽川「全く長生きできそうにない人生だね」

ヶ原「阿良拉致くんと呼ばれているわ」

羽川「少しまい」

ヶ原「死ぬまで秒読みとも」

羽川「うん？ ああ、秒読みと暦がかかってるんだ……あのね、戦場ヶ原さん、思いついたことをそのまま言うのをまずやめよっか……」

ヶ原「え？ 副音声って思いついたことをそのまま言う場所じゃないの？」

羽川「違います。熟慮してください。五秒でいいから考えてしゃべってください！」

ヶ原「でもそれだと、発言が五秒おきになるわよ？」

羽川「考えながらはしゃべれないんだ……」

ヶ原「なけなしの勇気を振り絞って、これからもどんどん思いついたことをそのまま口にしていこうと思います。以上、戦場ヶ原ひたぎからの所信表明でした。それでは皆様、第二巻でお会いしましょう」

羽川「なぜ締めようとする！」

ヶ原「いやだって、見てよ画面。私たちの前に設置されたあのワンセグテレビを」

羽川「ワンセグではない。収録現場が過酷すぎるでしょう……」

ヶ原「あんなザマの阿良々木くんに対する、憐れみの表れとして締めようとしたのよ」

羽川「まあ、逆立ちとかね、シュールな画面だね。でも、どうだろう、支えなしで逆立ちとか、結構な筋肉とバランス感覚だね、阿良々木くん」

ヶ原「え？ だってこれ吸血鬼パワーのおかげでしょう？」

羽川「なんであなたは阿良々木くんが褒められると不機嫌になるのよ……どれだけ阿良々木くんを褒めたくないの、戦場ヶ原さん？ 悪口ばかり言っていないところも見つけていこうよ」

ヶ原「そう、この後の八九寺ちゃんのように、『カッコいい！』と言えと？」

羽川「言ってみたら、何かが変わるかも」

ヶ原「ではチャレンジ。……『うわーカッコいいパンツくらいいくらでも見せてあげようという気になるくらいカッコいいです』……いやいやいやいや」

羽川「いやいやいやいや、だね……」

ヶ原「何も変わりませんが。むしろ、阿良々木くんのことが少し嫌いになったけれど」

羽川「本当だね……ごめんなさい」

ヶ原「逆立ちしている男に土下座している少女……シュールすぎるでしょ」



羽川「土下座しているわけではないけど、なんか、光輪できてるし、神々しくさえあるかも、この画……」

ケ原「馬鹿な会話をしてるわよね、この二人。阿良々木くんもね、これくらい打ち解けて私たちと話してくれたらしいのね。私に対しても、羽川さんに対しても、あの男、おふざけにどうも距離があると思わない？」

羽川「まあ、これに比べれば、かなあ……」

ケ原「もつと逆立ちして、私たちのパンツを覗きに来てよ、と戦場ヶ原さんは言いたいわけなのよ」

羽川「言いたいのか？」

ケ原「ツインテールが動いてる、こわ」

羽川「阿良々木くんの触手も相当怖いけど……」

ケ原『愛』って字になってたしね」

羽川「ここは本当に大丈夫なのかなあ……」

ケ原「だからこれはね、阿良々木くんも悪いけど、八九寺ちゃんも悪いわよ」

羽川「ノリがよすぎるのよね……」

ケ原「はい、乱取り終了」

羽川「まさに乱取りだったね。Bパートここまでほぼ乱取りだよ」

ケ原「とはいえ、この後八九寺ちゃん、阿良々木くんとはほとんど目を合わせないところを見ると、本当は怒ってるのかもしれないわ。静かに論じているような口調でいながら本当は激しているのかも」

羽川「なんでそんなひねた見方を……」

ケ原「それらしいことを言って、早いところこの変態との会話を切り上げようとしている可能性が、私調べで八十九パーセントあるわ」

羽川「八九寺だけに」

ケ原「真宵だから四十一パーセントって言ってもよかったんだけど、それだとイメージとしてあんまり多く聞こえないかもしれないじゃない？ だからベタだけれど、あえて八十九パーセントでいったの。こんな、ベタランって言われちゃうかしら」

羽川「そんな説明を求めているんじゃないけれど……」

ケ原「え？ でも副音声だから、裏話をしないと」

羽川「うまくないギャグの裏話を求められてはいないと思う」

ケ原「あれ？ 気がつけば、そろそろ第一話が終わりそう？」

羽川「そうだね。テレビ放送時はこのあたりからスタッフロールが流れ始めたんだよ」

ケ原「ああ、思い出した、思い出しました。私の名前が妹さんより後ろになって、ブチ切れた覚えがあるわ。ディスクでは修正されていればいいのだけれど」

羽川「そこまで怒るようなこと？」

ケ原「テレビにテレビを投げつけたわ」

羽川「戦場ヶ原さんの家、テレビないでしょ……そういえば、どうやって見たの？」

ケ原「そりやもう、夜中の学校の視聴覚室で」

羽川「怖いことするなあ……」

ケ原「あら、怖くなんかないわよ。夜の学校が怖いとか、おほほ、子供じゃないんだから」

羽川『おほほ』って、漫画界の住人ですか。いや、怖いのはあなたが夜中の視聴覚室で一人、テレビを見ている  
図よ」

ケ原「一人とは言っていないわよ」

羽川「あつ、誰かと一緒だったんだ」

ケ原「一人だけど」

羽川「……神原さんとか、阿良々木くんとかを誘えばよかったんじゃない？」

ケ原「ああ、あの二人は神原の家で一緒に見たって言ってたかしら」

羽川「怒ろう。それは怒ろう」

ケ原「だって、神原が喜ぶのだから。私も神原には弱いわ」

羽川「弱すぎでしょう……首をねじるんじゃないかったの？」

ケ原「私が戦場ヶ原雄山だとすれば、神原は栗田駿河というわけよ。もしくは、飛沢駿河」

羽川「かかっていると、『原』だけだし、それも海原先生は『ばら』でしょう？　だから、思いついたことをね、戦場ヶ原さん、私、あの、あなたのために言ってるのよ？」

ケ原「え？　羽川さんがうるさく言ってるのは私のためだったの？」

羽川「うるさいって思ってたんだ……」

ケ原「しかし、阿良々木くんと八九寺ちゃん、あれだけの傍若無人な振る舞いをしておきながら、なんでしよう、この、いい話風に終わろうというこの雰囲気は」

羽川「いい話風だよ、何もしてないのに。スカート覗いて楽しく遊んでただけなのに」

ケ原『他のやつにお前を助ける暇なんて与えない』って、俺様なセリフね。こういうセリフを私にも言ってくださいという話よ」

羽川「戦場ヶ原さんが丁寧に頼んだ……！」

ケ原「第一話おしまい」

## ED

羽川「そしてエンディングテーマ。Clarisさんの『ナイショの話』」

ケ原「よく言ってくれたと！」

羽川「う……何急に大声出して、びっくりした」

ケ原「いやほんと、よく、よく、よく！言ってくれたと私は言いたい。ほんと、阿良々木、お前そのときになっても遅いんだからな、と。ずっと私がこのままにいるなんて思ってたんじゃないやねえぞ、と」

羽川「溜まってるなあ……」

ケ原「ね？　この歌を照らし合わせて見てみれば、冒頭の拉致監禁も納得でしょう？　オールで阿良々木が悪いのよ」

羽川「呼び捨てにしちゃダメ。……いや、彼氏彼女なんだから別にいいんだけど……」

ケ原「ところで、さっきチェックし忘れちゃったんだけど、どうだったかしら。私の名前と、阿良々木月火さんの名前、どっちの方が先に出ていたかしら」

羽川「いやいや、いいじゃない。そんなところこたわらなくても。大人の余裕を見せてあげようよ」

ケ原「いやいや、そこはちゃんとけじめをつけておかないと。私に求められているのはおばあちゃんの優しさではなく、お姉さんの優しさなのだから」

羽川「大人の余裕というか、大人のやり口だね……」

ケ原「この後二話で、阿良々木くんのもう一人の妹さんが登場するのよね」

羽川「うん。本人の登場は二話から」

ケ原『かれんビー』ってタイトルなのに、名ばかりタイトルとはこのことだわ」

羽川「そんなこと言い出したら、あれだよ、私なんかだよ。私なんか、『つばさキャット』っていうタイトルで、其の式で、だよ？」

ケ原「ああ、物語シリーズ史上最強の地雷を踏んでしまったわ。えー、はい、これぞまさに『猫踏んじやった』と言ったところでしょうか」

羽川「何それ……誰に向けての総括なの？」

ケ原「さ、綺麗にまとまった辺り、でお待ちかねの第二話へ」

羽川「決して綺麗にまとまってはいないけれど、行くしかないよね。その前に予告編をお届けします」

## 予告

ケ原「何このキャラ。誰このキャラ。こんなキャラ存在したっけ？」

羽川「千石ちゃんの身に、一体何があったんだろう……ファイヤーシスターズがこの度めでたく本編に進出したから、今回はみんなで持ち回りでやろうということになったんだよね、順番に一人ずつね。戦場ヶ原さんもやったでしょう？」

ケ原「ええ、やりました。このディスクに収録されているはずよ、私の美声が」

羽川「自分で褒めることによって印象は悪くなってるんだよ……」

ケ原「予告が予告になっていないというのは引き継いでいるのよね。『ヒアウィーゴーでチェキラ』」

羽川 「まあ、誰が言ってもかっこいいセリフにはならないよね」

ヶ原 「二話へ続きます」

羽川 「続きます！」